

第 1650 回（7 月 25 日）

女性の意識と領域

——昭和 30 年代の生活記録を

素材として——

石 原 豊 美

昭和 30 年の喬木村は、世帯数が 1,777 戸、人口 9,225 人であり、総世帯の 7 割を占める農家では稲作と養蚕及び家畜飼養が行われていた。昭和 30 年代を通じて I 兼農家が最も多く、中でも雇用兼業が圧倒的に多い。また同時期の農家の可処分所得は少なく、経済的な余剰は小さい。

喬木村では、婦人会文化部によって『たんぼぼ』が作られ（第 1 号、昭和 30 年 7 月刊）、これが、編集・発行主体を替えながら昭和 38 年 12 月発行の第 11 号まで続いた後、10 年余りを経て昭和 50 年 6 月に再び第 11 号が発行されている。（資料の取扱いの関係上、以下、50 年 6 月発行号については第 12 号と読み換える。）

『たんぼぼ』第 1 号から第 12 号については、概観すると、作文形式のものが圧倒的に多く、他に短歌・俳句、詩、（団体旅行等の）印象記、その他（婦人会活動報告等）が掲載されている。

以下、内容を検討するにあたっては、扱う素材を作文の形式をとるものに限定する（第 1～12 号の計で 1,131）。母親としての立場から家族を扱ったもの、現在のことについて述べたもの、婦人会の会員として村の生活の現状について述べたものが圧倒的に多く、現在のことを述べた例が多い。

家族に関して、家庭の日常を記述する中で母子関係が描かれ、子供の成長がしばしば母子関係について再考する契機とされている。また、子供の教育及び就職が、家の経済状態との関係での位置づけを与えられる。

嫁の地位に関して、経済的な裁量のなさや家庭内の役割のとり方の困難さが、姑との関

係において記述される。また一方では、同様に姑との関係に触れて、家庭内の仕事（の多さと負担）について記述される。それを遂行する姑への謝意が表出されるものもある。

描かれている山村の生活には余裕はなく、労働の明け暮れであったり、経済的な困窮であったりで時間的（・精神的）な窮迫状態さえ記述される。が、そうした中での農業経営の展望が描かれたり、経済的な事柄を抜きにした家庭生活の重要性が述べられたりもする。

村の生活に関する記述は、女性たちの生活態度への批判を含む。日常生活において人のそしり話をしたりそれを伝え歩く性癖への批判が記述される。会合参加のし難い女性の生活状況についても述べられている。

が、また、社会の動きに照らして、山村での生活の現状が認識され、学習活動や集まりが求められる。それは純粋に楽しみとして位置づけられたり、現在の、（母親として主婦としての）役割を遂行するために希求される。もっとも、一方で会合の持ち方や参加者の態度に関しての意見も提起されている。

村の生活改善に関する大方の記述は、村の生活状態に照らして、儀礼の簡略化の推進を提唱するものである。結婚時の支度の合理化や実質化が提案されている。